

2017年度 都市環境デザイン会議 公募型プロジェクト

〈全国大会2018 in 倉敷〉

## プロジェクト発表 梗概

2018年9月28日・29日

発行：都市環境デザイン会議



## プロジェクト発表プログラム

9月28日(金): 第1日目(前半)		備考
15:00~ 15:05	趣旨・発表手順の説明(須田理事)	
15:05~ 15:25	発表①(岡 絵理子) 「地図アプリ」を用いた街理解の検証と アプリの改善方向の検討	関西ブロック
15:25~ 15:45	発表②(中村 伸之) 堀川みどりフェスを開こう	関西ブロック
15:45~ 16:05	発表③(福田 忠昭) ソーシャルハブ: 公共・民間セクターの共創による 新しいまちづくりのための場の創出に関する研究	九州ブロック
16:05~ 16:25	発表④(田口 泰彦) ニューヨークの環境グラフィックデザイン ～景観計画における環境グラフィックスの役割～	関東ブロック
16:25~ 16:45	発表⑤(埴 正浩) 地酒文化とまちづくり ～北陸4県の酒蔵を訪ねて (その3)	北陸ブロック
16:45~ 17:05	発表⑥(吉田 誠一) 夜の水彩カフェテラス	関東ブロック
17:05~ 17:20	前半まとめと後半予告(伊藤理事)	

9月29日(土): 第2日目(後半)		備考
10:30~ 10:50	発表⑦(柳田 良造) ローカル線の環境デザインセミナー	中部ブロック
10:50~ 11:10	発表⑧(阿部 彰) 「電動車椅子利用者のための、街のQOLガイド マップ」づくり	関東ブロック
11:10~ 11:30	発表⑨(浦西真維/松榮友里) 四国の都市環境デザイン 見学事例集とモデルコース作成 ～香川県編～	四国ブロック
11:30~ 11:50	発表⑩(林 靖之) 防府駅前の空き地を活かすパブリックデザイン プロジェクト	中国ブロック
11:50~ 12:00	総括 (岡理事)	

注) 各発表の持ち時間は、説明13分+質疑応答7分=計20分。

# 「地図アプリ」を用いた街理解の検証と アプリの改善方向の検討(その2)

関西ブロック 岡 絵理子

## 1. 「大阪こちずぶらり」の楽しみ方

### ■景観は時間の表面に存在する

古い時間は刻々と過ぎ去り、新しい時間が常に目の前に現れる。その意味で私たちを取り囲んでいる環境、その表れである景観は常に変化している。ある時代の景観の表層を記録したものの一つが地図である。いろいろな時代の地図を見ることによって、その時代の景観の姿に接することができる。

いくつかの時代の地図を重ねると、時代時代の景観の層が生れる。その層の間を泳ぎ回ると、新たな環境や景観に発見がある。中澤新一は「アースダイブ」という概念を打ち出したが、地下に潜るのではなく、時代時代の常に表層を体験する。「タイムダイブ」というか「タイムサーフィン」といった方がよい。

本研究では、私たちが作った地図アプリ「大阪こちずぶらり」を用いた「タイムサーフィン」の楽しみ方を検討し、いくつかのシナリオの作成を試みた。

### ■「大阪こちずぶらり」に収納された5つの時間のレイヤー

- ◇ 17世紀中頃／大坂三郷及周辺図(摂津、河内、和泉国の広い範囲を描く)
- ◇ 1687年頃／新撰増補 大坂大絵図(大坂三郷を描く)
- ◇ 1908年頃／正式2万分1地形図(本格的な近代地形図のはじまり)
- ◇ 1948年／米軍撮影空中写真
- ◇ 1974年／市街化過程および戦災図(戦前の市街化過程と戦災消失地域を表示)

「大阪こちずぶらり」では、これに加えて、現在の地図と行き来ができるようにしている。

### ■二つの時代の風景・景観画～切り取られた大坂の風景

5つの時間のレイヤー(地図等)に加え、2種類の大坂の風景ないし景観を表した絵図を収納して

いる。これを用いて昔の大坂のイメージをとらえることができる。

◇ 浪花百景:幕末に3人の絵師によって描かれた大坂の名所図会。100枚程度。

◇ 明治・大正大阪百景:明治37年(1904)生まれの野村廣太郎が50歳を過ぎたころから10年をかけて描いた明治大正時代の風景画。このなかから町並みの特徴がわかる50景を抽出して示している。

### ■地図アプリの技術的ユニークさ

使ってみて理解するのが一番だが、技術的なユニークさがいろいろある。第一は、全体としては物理的には重ならない、つまり互いに歪みがある地図や航空写真を、地点ごとには重なるようにブラウザに示すことができる。地点間の数学的処理でシステム化されているので、スムーズ感を持って見る事ができる。

第二は、クローズアップ機能が効果的に使えることである。大判の地図を目を近づけて見ることは普通はなかなかできない。この地図アプリでは精度の高いスキャン画像を用いているので、ブラウザで拡大して明瞭に見ることができる。その効果によって、紙の地図を見るのでは得られない情報が得られる。

### ■変わるもの、変わらない・変わりにくいもの

19世紀末の大坂を描いた「浪花百景」の描写地点の分布と、1988年に調査された大阪市民の好きな眺めの地点を比較すると分布に共通性があった。その共通性は、<水辺・水面・流れの曲り>、<坂・微高地・高台>、つまり地形が愛好される眺めと関連しているのである。

もう一つ際だった慣性力を持ったものに、宅地割がある。今日の船場の宅地割を見ると、江戸時代の痕跡が残っている。土地に対する人の権利を示す土地に引かれた線が、持続の慣性力をもっているのである。

また、道路の線形は、地形とこの人の権利に由

来する宅地割の線によって決められる場合が多い。従って、道筋もまた持続の慣性力を持つ。

「変わるもの、変わらない・変わりにくいもの」、これを実際に地図アプリで確かめてみるのも楽しみ方の一つである。

## 2. タイムサーフィンの仕方～何からは始めるかのヒント

◎ 今日の都市空間と大きな違いがないので「正式2万分1地形図」からは始めるのが素人にも分かりやすい。大きな施設の敷地、近代的な名称の土地利用を探すといい。

◎ 大坂三郷から南は四天王寺までの、江戸時代の大坂市街に着目する場合は、「新撰増補 大坂大絵図」からは始めるのがいい。

◎ 上記の外側、大坂を取り囲む農村的なエリアに注目する場合は、「大坂三郷及周辺図」を用いるのがいい。

◎ 「浪花百景」「明治・大正大阪百景」の気になる絵から探っていくのも面白い。

◎ 「1948年／米軍撮影空中写真」には空襲で破壊された町が写っている。

◎ 「市街化過程および戦災図」で空襲エリアを確認できる。

## 3. 古地図で遊ぶ9つのシナリオ

今回は研究会メンバーの発案によって以下の9つのシナリオを作成することができた。

### ■東横堀川を古地図でぶらり

東横堀川は、1594年に大阪城の惣構として開削された堀川であり、水都大阪に現存する最も古い堀川だ。東横堀川を北（葎屋橋）から南（農人橋）へ、まちを読み解きながら歩く。

### ■堀から始まり堀に終わる；大阪の水運の軌跡

天王寺御蔵の入堀川、難波御蔵の新川、そして天満堀川をたどる。堀の線が、繋がったり、埋められたりしながら生き続けていることを確認する。

### ■大阪の公園用地を探索する

江戸時代の干魚市場を中心とした永代濱が戦後米軍の飛行場になり、それが鞆公園になった。また、大阪城公園は、明治以降は軍の拠点が置かれ、兵器工場もあった。こうした公園の過程を知る。

### ■阿倍野（上町台地南部）の変容をたどる

平べったい都市にある丘「上町台地」、高層化が進展した現在では標高20m弱という台地は都市におけるほんの小さな丘にすぎないが、その地形の特徴を楽しむ。

### ■玉江橋から四天王寺の五重塔が見通せたことについて

浪花百景を見ると、四天王寺の五重塔や大坂城、西本願寺（北御堂、南御堂）、火の見櫓が際立ったランドマークとして描かれている。遠方から見通せたのである。それを確認する。

### ■江戸の佃の故郷、大坂の佃をスタートに大坂の漁業集落を探索する

大坂が都市として発展し、住民が増加するにつれて、漁業もまた盛んになっていった。有名な江戸の佃の故郷は大坂の佃村と大和田村で、他にも漁業を行なった集落があった。これを探索する。

### ■大坂の釣りと釣りびと

「なにわ」は「魚庭」とも書かれ、釣りが盛んに行われていたと考えられる。ところが、昔の大坂の釣りの記録が少ない。『浪花百景』の3枚の釣りにくいし釣り人の絵から探る。

### ■戦争による米軍の空襲をまぬがれた街の今日

このアプリには、戦後間もなく撮られた米軍撮影空中写真と市街化過程および戦災図が組み込まれている。これらによって、空襲を経た大阪の市街地の特徴を知ることができる。それを具体的に見る。

### ■大阪がどのように東洋のマンチェスターになったか

明治中期ごろ、紡績業、鉄道業などを中心に、綿織物業、それらを支える商社、銀行の活動、また、これらに加え、第一次世界大戦以降になると機械金属化学など重化学工業の躍進も著しかった。こうして大阪は東洋のマンチェスターになった。その歩みを地図の移り変わりに探る。

## 4. 結び～報告冊子の作成と公開

今回の研究の成果として『古地図で遊ぶ「大阪こちずぶらり」の楽しみ方』の冊子を作成した。冊子は倉敷で開催される全国大会2018の参加者に配布する他、そのデジタルデータをJUDIホームページに掲載する予定である。

# 堀川みどりフェスを開こう

～2つの世界遺産をつなぐ都大路の復興を（京都市）～

関西ブロック 中村伸之

## 1. 目的

平安京造営時につくられた堀川通(京都市)は、2つの世界遺産(西本願寺と二条城)をつなぐ都大路である。戦時中の建物疎開(空襲による延焼防火帯)と戦後の川の埋め立てによって幅員50mの京都市で最も広い大通りとなったが、幅員に見合った豊かな緑がなく、魅力や親しみが感じられない。私たちは中京マチビトCafé(区民集会)をきっかけに「堀川みどりのまちづくり会」を立ち上げ、地域の皆さんと堀川通の緑やにぎわいの復活を考えビジョンを共有する活動を続けている。

## 2. 概要

沿道の住民・店舗の協力を得て、「堀川みどりフェス」を開催した。壺屋町(堀川蛸薬師上る西)を中心に、下記の内容を実施した。

- ①「堀川マップ」堀川通エリアの文化・景観スポットを紹介し、お店めぐりができ、チラシにもなるマップを制作した。
- ②「みどりのマーケット」沿道店舗でのフリーマーケット、園芸市、園芸教室。
- ③「みどりのモデル空間」堀川通の一面に仮設の緑化モデル空間を短期的に実現する。プランター植栽や染めのイメージのノボリ・垂れ幕を展示。本部の展示1か所、店先展示4か所、プランター展示8か所で展示した。

堀川みどりフェスは新聞等で大きく紹介され、堀川通には緑が少ないという認識が共有され、「何とかしたい」「何とかなりそう」という共感が広がった。

仮設の緑化モデル空間を設けたことで、広い歩道空間をどのように緑化すればいいかのヒントを得た。府内各地から集めた植物の力で都市景観に潤いが生まれ、参加者や地域住民も、堀川通の緑の可能性が実感できた。

## 3. 日時、場所、参加者、掲載紙

2017年11月23日、京都市中京区堀川蛸薬師の路上、地域住民や通行者1000人程度。

京都新聞、毎日新聞、京都リビングに掲載。

## 4. その後の活動と連携

「堀川みどりのまちづくり会」の存在と主張は住民や行政に認知されることになった。

特に、20年以上前から堀川の水を復活させることを主張し、実現にこぎつけた「堀川と堀川通を美しくする会」とは連携してまちづくりをする関係となった。

同会が主催する「堀川桜まつり」や「京の七夕・堀川かがり火のみち」では、オーガニックマーケットを担当し、「堀川みどりのまちづくり」をアピールし運営資金の調達を行うことができた。

## 5. 堀川木陰まつり

堀川みどりのまちづくり会は2018年9月に「堀川木陰まつり」を開催する。

### ●たねまきcafe(9/24、堀川高校横の歩道)

テーマ：みどり、景観、ヒートアイランド・地球温暖化防止を考える

街路樹サポーターとして堀川通のみどりの管理を始める第一歩として、種まきや植付けを行う。あわせてパラソルやテーブルでくつろぎにぎわいのモデル空間をつくり、音楽演奏や古写真の展示やオーガニックマーケットを開く。古写真の展示や打ち水実験や国内外の「みどりの街路」の印象調査も行う。

### ●シンポジウム(9/26、中京区役所)

テーマ：みどりの京都型低炭素社会・京都型エコ交通を考える

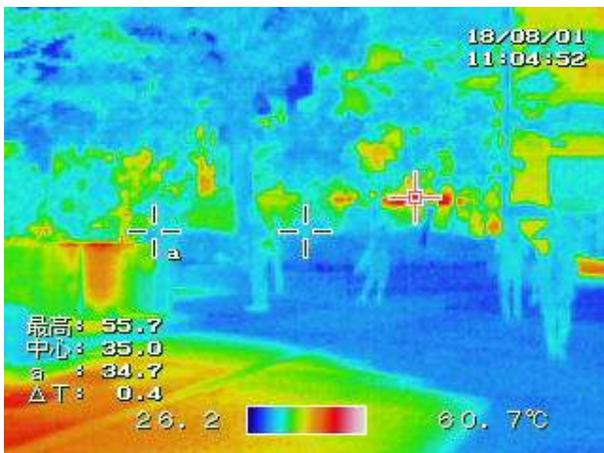
「みどり・にぎわい・快適交通」の3つの視点から堀川通の課題と解決策を考え、地域住民と行政に向けた提案を行う。



2017年11月23日「堀川みどりフェス」の様子。



2018年4月「堀川桜まつり」、8月「京の七夕・堀川かがり火のみち」の様子。  
埋立てを免れた上流部で開催された。



2018年8月サーモカメラで木陰と日なたの温度を計測し、水と緑の冷却効果を実証した。



9月「堀川桜まつり」の会場イメージ図。

# ソーシャルハブ：公共・民間セクターの共創による

## 新しいまちづくりのための場の創出に関する研究

九州ブロック 福田忠昭 (LOCAL&DESIGN 株式会社)

### ■研究の目的

今後、人口減少・少子高齢化の中で、まちづくりの担い手不足や後継者育成といった課題は大きい。従来の自治会・町内会といった組織やコミュニティセンターや公民館といった公共施設のあり方も形骸化や建て替えを機に再検討される場合が増えてきている。



写真：研究会の様子

一方、最近の民間都市開発の中で、「ソーシャルハブ（社会性のある施設）」の導入が生まれている。「ポスト2020の都市づくり」（2017.7.5 学芸出版社）という書籍の中で、松岡一久氏は、これまでの都市開発のプロセスは大きく変化し、「第四世代」を迎えたという（図1）。「ソフトインフラ開発業務」という新しい領域が誕生し、話題性や集客力という視点から「社会性のある施設」の導入が求められているという。「社会性のある施設＝ソーシャルハブ」とは「コミュニティ、環境、子育て、福祉など社会的なテーマによる情報発信施設」と定義されている。

福岡市でも商業施設の中にコワーキングスペースなどの就業のためのスペースなども誕生し、直接的な消費のスペースとは異なり、人の集まる場をデザインしている例が増えてきている（表1）。これまで、このような社会的な場の提供は、自治

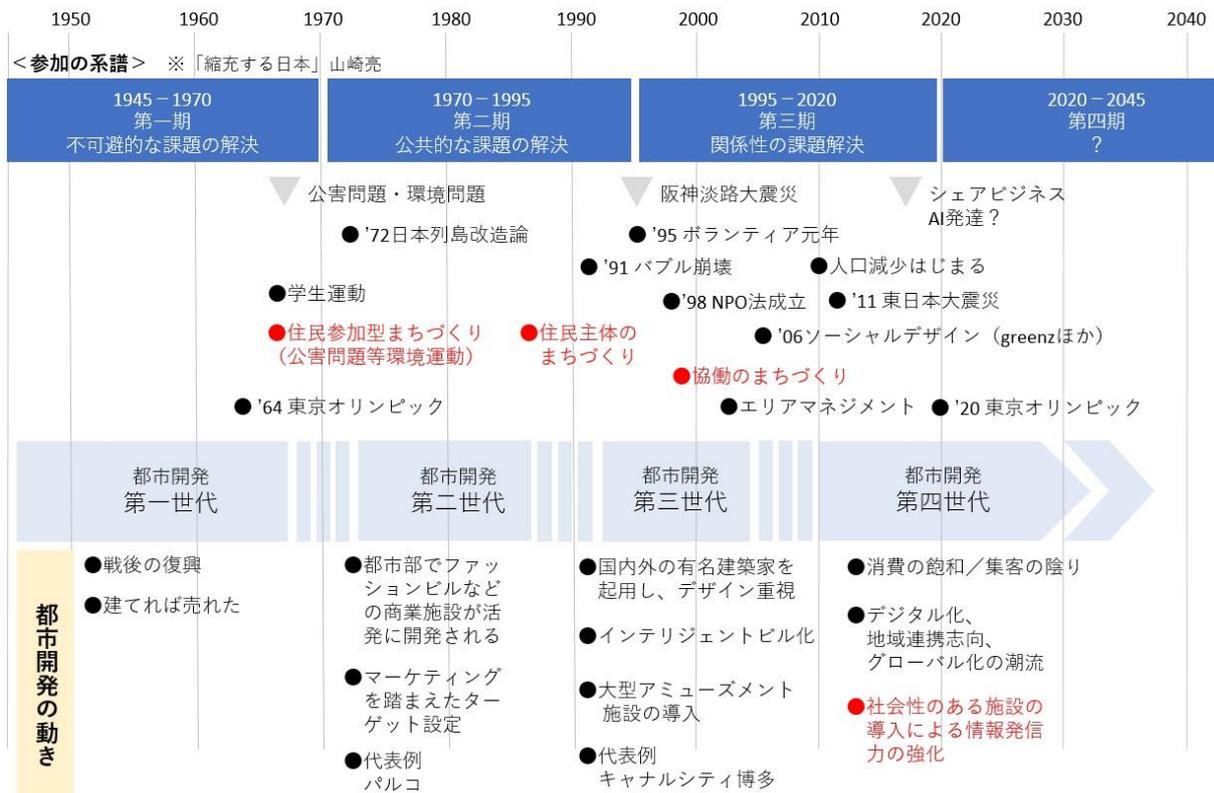


図1 戦後の都市開発の動き

表 1：福岡市内の主な商業施設内のオフィスの機能の導入事例

商業施設名	施設名	内容
福岡 PARCO	The Company	プロジェクト創生型ワークスペース
イムズ	ママスクエア	託児付きワーキングスペース
ソラリアステージ	SPACE on the Station	多目的レンタルスペース

体など公的セクターが担ってきたわけだが、民間事業者による取り組みが始まっており、民間側が感じているメリットと公的セクター側の抱えている社会的課題などをいかにマッチングさせるかが重要で、うまくいけば、双方にメリットが得られる。公的セクターにとっては、主体的に社会的課題解決に取り組む人材の獲得で、民間事業者は、新しい場の創出による不動産や施設の価値向上などである。

特に地方都市において、公共、民間セクター単独では開設や運営が難しい「まちづくり拠点」のような施設の整備・運営が可能になるのではないかと考え、そのような事業の背景とスキームを明らかにすることを目的とする。

### ■市民とまちづくり関係の整理

まちづくりに市民が参加する動きは、1970年代の公害問題の解決などをきっかけに生まれ、「ワークショップ手法」などを用いる合意形成の手法が広がった。阪神淡路大震災を契機に、2000年代に広がった「協働（共働）のまちづくり」では、新しい公共の考え方などから、行政と対等な立場で、市民・企業市民がまちづくりに関わっていく形となった。なかでも「エリアマネジメント手法」は、一定のエリアの価値や魅力を高めていくために、さらに大学やNPOなども交えて取り組んでいく活動として、広く展開していった。ここでは、地域の目標や責任を共有化し、互いの立場を尊重しながら、各セクターがそれぞれの役割を担うという形である。さらにこの形が進化した「共創のまちづくり」が生まれている。

「共創のまちづくり」では、各セクターが、立場

などの境界を乗り越え、新しい価値を創造していくために活動していく形である。企業は、既存事業の収益拡大や新規事業の創出などを目指し、市民は、ボランティアだけに頼らず活動の継続に必要な収益を上げるような事業に取り組むなど、各セクターが、地域の課題解決や価値創造を進めていく。ここでは、リビング・ラボなどの手法を用いて、企業と消費者としての市民などが新たなサービスや事業をともに生み出している。そして、このような活動の拠点となる場づくりが求められている。

### ■ソーシャルハブの事例調査

全国の商業施設等に開設・設置されているサードスペースやコミュニティスペースから「渋谷ヒカリエ 8/」、「ECOZZERIA」、「MAD city」の事例について「事業ビジョンの共有」、「事業モデルの策定」、「ハード計画」、「運用・プロモーション計画」を比較、検討した。

#### ○事業ビジョンの共有

民間事業などでは、コンセプトを含めたビジョンの共有は非常に大事なことだと捉えられるが、住民参加などでつくった「まちのビジョン」などはなかなか共有されない。途中で何のためにやっているのかわからなくなることもある。ビジョンの取りまとめだけでなく、いかに共有していくかに時間をかけるべきだろう。

#### ○事業モデルの策定

誰がプレイヤーになるかということが非常に重要である。課題を発見した人が、その解決を最後までやりたいと思うと、多くの人を巻き込みやすいのでは。ミッションが明確になると事業者も出てくるだろうが、ソーシャルな問題をテーマにするとなると、事業者やプレイヤーの資質も重要だろう。多様な人とネットワークを形成しながら、取り組めるような人や事業者が重要。

#### ○ハード計画

中心市街地、商業エリアのソーシャルハブは、単に買い物に行く以外の動機をつくること、「why」が仕組みに入っている。また、比較的家賃の低い場所などをリノベーションによって、再生するような動きとも相性がいい。

	①事業ビジョンの共有	②事業モデルの策定	③ハード計画	④運用&プロモーション計画
渋谷ヒカリエ 8/	<ul style="list-style-type: none"> <li>・シブヤらしいこと</li> <li>・続けること</li> <li>・キュレーション</li> <li>・交流すること</li> <li>・コミュニティを大切に</li> <li>・編集していくこと</li> <li>・具体的にすること</li> <li>・育てること</li> </ul>	A:コート内での企画 B:コート内での企画 C:コワーキングスペース d47食堂,d47ストア D:視察、 学生インターン制度	一日に300万人が行き交う巨大ターミナル「渋谷駅」に直結した立地。商業機能があり、ホールがあり、常に多様な人が行き交う場所に位置する。 フロアの中心には「コート」というオープンスペースが設けられ、それぞれの機能が交わるように計画されている。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ほぼ毎日コートが利用されている。</li> <li>・d&amp;ddepartmentの集客の良い企画と食堂の利用。</li> <li>・フロアを自由に使用し、多様な企画を行う。</li> <li>・継続的なイベントや講演を呼び込む。</li> </ul>
ECOZZERIA	様々なひと・モノ・コト・情報が交流することで、環境共生につながる新たな技術やシステムなどを生み出していくとともに、一般の方が実践できる環境配慮型ライフスタイル、ワークスタイルを提案。 大丸有エリアが日本・アジア・世界における「環境共生型まちづくり」のモデルとなることを目指す。	A:エコキッズ探検隊 B:丸の内朝大学 C:コワーキングスペース 企業協賛 D:エリアマネジメントの 全国展開	大丸有の都心の真ん中に位置しており、主にビジネスマンやクリエイターをターゲットとしている。 緑化設備や環境を考慮した最先端のワークスペースを設けるなど環境共生を考えるきっかけとなるような計画と未来の働き方を提案するような計画になっている。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大丸有地区全体でのイベントを行い他の企業や団体、一般の人へも環境共生を働きかけている。</li> <li>・継続的なイベントを子どもをターゲットとしていたり、出勤前の朝の時間を利用したものを企画して集客を図っている。</li> </ul>
MAD City	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クリエイティブな自治区をつくらう。</li> <li>・刺激的でいかにした隣人をもと。</li> <li>・地元をリスペクトし、コラボを楽しもう。</li> <li>・変化を生み出そう。</li> <li>・新しいルールを発明しよう。</li> <li>・仕事場も住居も、DIY精神で自由に創造しよう。</li> <li>・河辺でも通りでも駅前でも、街を遊びつくそう。</li> <li>・東京のみならず、世界とどんとつながらう。</li> </ul>	A:ギャラリーや各施設での企画 B:ギャラリーや各施設での企画 C:不動産業、住民によるフリーマーケット、展示会 D:新たな拠点施設開拓、MAD cityの拡大	首都圏のベッドタウン・千葉県松戸市。現在は48万人が住む町の中心地に当たる松戸駅周辺に位置する。500M圏内に5つの拠点施設を運営し、それぞれの施設とMAD Cityに暮らす住民が緩やかに繋がりあう計画になっている。MAD Cityの持つ不動産はDIYが可能なマンションやアトリエ展示室があり、クリエイターに暮らしやすい生活を提供している。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・常に新しい空き家を探し、移住を進めている。</li> <li>・住民の活動を発信、全面的に協力し、活動しやすい場所作りにも注力。</li> <li>・継続的なイベントと、クリエイターをつなげ、また新たな住民へのプロモーションを行っている。</li> </ul>

図2 事例の一覧

### ○運用&プロモーション計画

「洗練された」印象からか、ソーシャルハブは上から目線のような気がする。誰でも立ち寄りそうで、実はそうではない。どのような人たちとソーシャルハブをつかっていくかが重要で、子どもや高齢者、様々な社会的弱者などをどう整理していくか、プロデュースが必要だろう。

### ■「こととば那珂川」の取り組み

「こととば那珂川」とは、福岡市に隣接し、2018年に市政施行を控える那珂川町の新幹線駅、JR博多南駅前に立地する博多南駅前ビルのリニューアル及びそこをまちづくりの拠点に再生するプロジェクトである。2015年度よりスタートした活動では、駅前ビルを拠点に、さまざまな地域住民や組織と連携した「まちづくり活動・事業」の試行に取り組み、「まちづくりオフィス」に必要となる「場（空間）」と「仕組み（組織やコミュニティ）」の検討を行った。この「まちづくりオフィス」という考え方が、ソーシャルハブに近いものと考えている。

「まちの入口、アイデアの出口」というコ

ンセプトのもと、各フロアの機能を大きく変換させた。

当初、情報発信拠点として整備された博多南駅前ビルだが、単に情報を受け取るだけの場所ではな

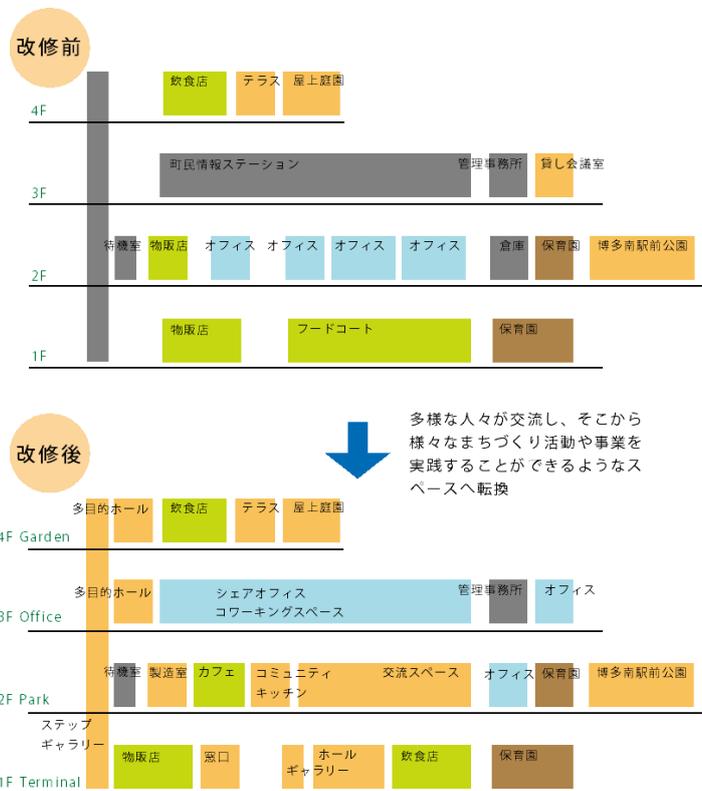


図3 博多南駅前ビルの機能の変化

く、施設の各所で、様々な「活動を実践できる」ような場を設けることとした。1階には市民活動の中心となるギャラリーやホール、2階は交流を生むためにカフェやフレキシブルなイベントスペースを設けた。さらに、3階には「新たな働き方にフレキシブルに対応できる場」を設け、那珂川町全体のまちづくり活動や様々な地域活性化などの事業に関係していくような人々が集まることを期待してシェアオフィス、コワーキングスペースを設けた。4階には、飲食店を設け、農園なども準備し、「食」を通じた活動の場として機能する。リニューアル後、2018年4月より運営事業者が変わり、新たな運営がスタートした。



写真：新しい博多南駅前ビルの様子

## ■まとめ

### ○まちづくりのためのソーシャルハブとは

ソーシャルハブとは、社会的なテーマをフックに気軽に人々が集まるとともに、ハブであることから集まった人同士がつながり、新たな関係性をつくるのが求められる。そこまでであれば、趣味や嗜好を共有し合う場であるが、特技や専門性を活かし、テーマに関する社会的課題の解決につながる活動へ発展することで、まちづくりの展開が生まれてくる。都心部の商業施設等での動きは、まだまだそこへの到達度は低いように感じる。このような動きは、例えば、食をフックにした「シェアキッチン」、家事をフックにした「シェアランドリー」、本・読書やアートなどの文化活動をフックにしている例もあり、シェアリング・エコノミーとの関係性も強いように感じる。これらは新しい都市型のコミュニティを生み出しているが、ま

ちづくり活動として、意図的に展開を試みるのがまちづくりのためのソーシャルハブづくりにつながると思っている。

### ○まちづくりの拠点となるソーシャルハブづくりにむけて

ソーシャルハブのハード空間に関しては、空家の活用や遊休不動産のリノベーションと非常に相性が高い。また、2015年から大和リースが「まちづくりスポット」という場づくりを行っているが、新しい商業施設の整備に合わせて、地域社会・NPOと共に推進する地域交流の活動拠点を設け、運営のためのNPOなどを立ち上げ、ソーシャルハブが生まれている。これらは郊外や地方都市での試みでたいへん興味深い。

さらに実効性のあるまちづくりの拠点となるためには、多くの利用者との接点となるコミュニケーター（顔が見える責任者）が重要となる。

場の運営という視点からは、「儲け」を生み出す仕組みとして「カフェ」などの導入が主流で、さらにシェアキッチンなどはスキルのシェアというもので、料理の得意な女性などが小さなビジネスとしての可能性も秘めている。今後、空間と人材、スキル、コンテンツ、それらをつなぐコミュニケーターなどのハード・ソフトの総合的なデザインによって、まちづくりの拠点となるソーシャルハブが展開していくと考えている。

### <参考>

#### ■第1回ソーシャルハブ研究会 開催概要

【日時】平成30年1月26日、19:00~21:00

【場所】福岡市中央区大手門 3-12-12 BLDG64 3階

【参加者】<会員>尾辻、福田、片田江、十時、山本、<会員外>榎本、水谷、平田（L&D）

#### ■視察&第2回ソーシャルハブ研究会 開催概要

【日時】平成30年6月9日、15:00~18:30

【場所】<視察>福岡県筑紫郡那珂川町中原 2-120 博多南駅前ビル「ナカイチ」

<研究会>福岡市博多区博多駅前 1-14-16 博多駅前センタービル4階、howoffice net 会議室

【参加者】<会員>尾辻、福田、岩永、片田江、柴田、高橋、新田、山本、<会員外>榎本、水谷、黒瀬、平田（L&D）、西村（熊本県大）

## 景観計画における環境グラフィックスの役割

### ～ニューヨーク/マンハッタンの事例をリサーチ～

関東ブロック 田口泰彦

成熟社会における都市環境／景観は大きく変わりつつあり、機能性や安全性を追い求めるだけでなく、そこに住む人々に街のアイデンティティー／街の居場所作り (placemaking)、アメニティー等の創出が求められてきている。特にアメニティーは都市計画のうえで環境の美化、快適性と言う概念があり、快適に過せ、美しい街並／空間を創造することはこれからの街作りの必要条件になっている。街を美しく、快適にする構成要素としての視覚的な観点からみた環境グラフィックスがあり、大きいな効果を出している。環境グラフィックスは1970年後半頃からアメリカで展開されて来た新しいデザイン分野である。コンセプトはグラフィックス、建築、ランドスケープ、インテリア、プロダクトデザインの各専門分野を含み、ウェイファインディング、アイデンティティーや情報を伝え人と場所を結ぶツールを作ることであるとアメリカ環境グラフィックス協会 (SEGD) は述べている。

視覚的要素から成る環境グラフィックスは都市空間の演出に非常に強いインパクトを与え、地域美化にも大きな役割をしている。景観計画において環境グラフィックを巧みに取り入れれば、人間味があり親しみのある快い環境、寛げる空間、何か刺激があり非日常的のある空間、街のアクセントになる空間の創出が可能となります。都市のイメージは公共空間を質の高い視覚的な要素で強化することが出来ます。街の玄関口である駅、空港、メインストリート等は街のイメージを伝える最適の場所です。

今回ニューヨークのマンハッタンにおける事例-これまで無味乾燥であった交通機関の施設、駅、コンコース、町並み、駐車場、学校等の公共空間／施設を通し、アート、グラフィックス、色彩等視覚的要素が公共空間において効果的にインパクトを与えているカリサーチをした。街のイメージ形成や PLACEMAKING において大きな参考になるのではないかと確信しています。

また、環境グラフィックの分野は新しく、若いデザイナーの新鮮なアイデア、アプローチによって都市環境計画／デザインに大きく貢献出来るのではないかと考えています。

#### 地下鉄

114年の歴史のあるニューヨークの地下鉄は暗く、汚く、臭く、危険である等ネガティブな印象が強い。新しい貿易センターのあるフルトン駅は9/11のテロの跡地開発の目玉としてカラトラバによってデザインされローワーマンハッタンのシンボルと成り、又新しい路線が完成し、新駅は地下鉄の駅のイメージを大きく変えました。特に今回のテーマである環境グラフィックスに関してはMTA (メトロポリタン交通局) のアート&デザイン課が大きな役割を果たしています。1985年に創立されたこの部署は今までに300のアートを駅構内に設置してきています。NY知事のコモは2番街の新駅オープンで『公共の仕事は毎日の生活の質を高め、コミュニティの人々が集まり、地元の文化や街の価値を共用するこのような公共空間は必要である』と述べています。トップの公共空間の質向上や PLACEMAKING に対する強い理解が感じられます。

#### マンハッタンの駅におけるアートインスタレーション

地下鉄の駅を象徴的に表しているタイルサインは1904年のオープン時に地区の特色を表し、長持ちし維持が容易と言う事で使われた。アートの雰囲気を持ち地下鉄の歴史を伝えるこれらのサインはNYの素晴らしい財産になっている。

-ロイ ルシュテュエインスタイン、1994年の作品、2002年施工@タイムスクエア駅

-ソル ルビット、NYの建物の壁画、ランドスケープオブジェ等も多く製作@コロンビア サークル駅

#### -34丁目 Hudson Yard 駅

タイムズスクエアから新しい再開発されているハドソンヤードまで伸び34丁目に新駅が2015年9月にオープン。この地区には新しいオフィス、住宅、および小売スペースを含む16の超高層ビルから成る。商業オフィススペース、レストラン、カフェ、マーケット、およびバーを備えた小売センター、ホテル、文化スペース、住宅、学校、および公共空間が計画されています。駅の壁画はガラスモザイクでゼノビア ベイリイによってデザインされ、タイトルはファンクショナル バイブレーション、大空間の天井に広がる鮮やかな天井絵は地下鉄内の最大級のインスタレーションです。



壁に描くのではなくプライウッドボードに描かれ季節ごとに作品は変えられた。昔の場所は建物が建ち現在ヒューストン通りに面して新しい壁が作られ、この作品はロンドン ベースのレクウナの作品。ブロードウェイとヒューストンの角にある建物壁面にある「THE WALL」は1973年にフォレスト マイヤーにより42のスチールアンカーでブルーに塗られ、ソーホーへの入口のシンボルとして知られている。

#### -HIGH-LINE

マンハッタンの高架式列車跡地を1999年に公園にし、ニューヨーク市が所有し市民団体が運営管理している。現在は34丁目、ハドソンヤード複合開発エリアまで伸びていて、開園してからマンハッタンの観光地として外部の人が多かったが最近周辺が開発され高級マンションが建ち地元住人の利用も増えている。アートプロがラムは2009年に作られ、建築のユニーク性を生かし地域の歴史、デザインを提供、周辺住民の意見を取り入れプログラムが作成されている。

この壁画はベルリン在住のアメリカ人アーティスト、ドロシーアイアンローネのカラフルな自由の女神像。現在の移民問題を表現している。

#### -MOMA CONSTRUCTION WALL

現在リノベーション中で30%拡大され、ジャンヌ・ヌーヴェルの高層マンションがこの場所に建設中で2019年にオープン予定。

#### -METROPOLITAN MUSEUM

夏の間建物に沿って夏の日差しを遮るために設置、赤のテントがモノリスの建物にアクセントを提供

#### -MUSEUM OF THE CITY OF NEW YORK

ミュージアムの階段を拡大した写真と言葉で空間を広げ、一般公開されていないNYの写真コレクションを使用して構成、歴史的引用文と写真は階段全体に貼られニューヨークのストーリーが作られた。

#### -PREP HIGH SCHOOL

生徒がいくつかの記号、パズル、謎解きを、考え、問題解決するツールとして進学専門高校の新築建物内に環境グラフィクスプログラムが作られた。

#### - MIDDLE SCHOOL

生徒の生活を変える場として豊かな色彩とタイポグラフィで活気ある学びの空間が作られた。学校の教育プログラムをベースにモーティベーションを引き起こすローガンが大胆にレイアウトされた。

#### -NEWARK AIRPORT

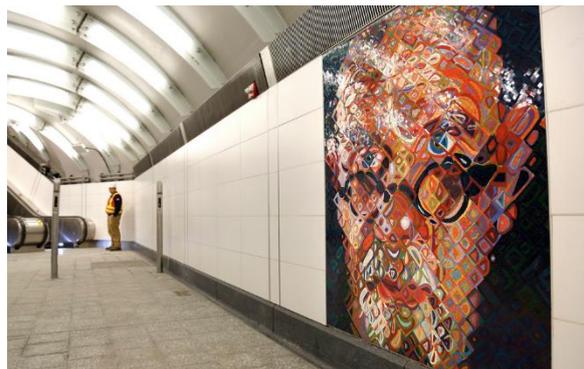
広い殺風景な荷物搬送エリアに豊かな色彩のアートで親しみやすい空間を演出

#### -54丁目駐車場

マンハッタンの駐車場の多くは地下にあり、狭く、汚いのが普通。タイポグラフィとスパークグラフィクスで美しく、シンプル、機能的に運転手に分かり易くデザインされている。



1



2



3

写真説明：

- |                 |                       |
|-----------------|-----------------------|
| 1. 96丁目駅完成図©MTA | 2. 86丁目駅完成図©MTA       |
| 3. 34丁目駅        | 4. ペンステーション©PENTAGRAM |
| 5. MOMA 工事囲     | 6. パアウリー壁画            |
| 7. HIGHLINE 壁画  | 8. NY シティーミュージアム階段    |



4



5



6



7



8

## 地酒文化とまちづくり～北陸4県の酒蔵を訪ねて～（その3）

### —酒蔵を核とした地域づくりのすすめ—

北陸ブロック 埴 正浩、上坂達朗、新田川貴之、水野一郎

#### はじめに

これまで、北陸4県の酒蔵を訪ね、酒造りや地域のまちづくりとの関わりを調査した。その結果、酒造りには、酒米と水と作り手が欠かせないことや、味や香りも北陸の食文化と密接に関係していることがわかった。

北陸の酒蔵の特長としては、小規模なものが多く、石高は兵庫県（灘）や京都府（伏見）には及ばないが、特定名称酒（吟醸酒、純米酒など）の製造割合が多いこと。また、立山や白山などを水源とする地下水や伏流水など美味しい水（軟水）が豊富なこと。酒米は、吟醸酒では兵庫県産の山田錦を使用しているが、地域独自の酒造好適米の研究生産が進められ、五百万石、雄山錦、富の香、石川門、おくほまれなども使用し、文字通り「地酒」へと進化していること。さらに、作り手は能登杜氏や越後杜氏の存在があり、その技術の伝承が求められている。

一方、近年、日本酒の消費量は国内では減少傾向にあるが、海外への輸出量は増加し、海外では日本食レストランが増加傾向にある。また、アメリカ合衆国への輸出では、特定名称酒の割合が多いことなどもわかった。

こうしたことから、北陸の酒造りは、地域資源（酒米、水、作り手等）を活かし地酒文化を育て、酒蔵を核とする地域づくりを進めることは、地方創生に繋がると考えられる。

そこで今回は、北陸の酒蔵とまちづくりの実態をさらに調査するため、5つの酒蔵を訪ねた。これまでと合わせると15蔵を訪ねたこととなる。また、これまでの一連の調査結果を元に、農家やレストランと連携するなどの酒蔵の多機能化についてや、日本酒と食文化、さらに、地酒文化とまちづくりについて考察したい。

#### 北陸4県の酒蔵めぐり

##### ① 越の華酒造（新潟県新潟市沼垂）

越の華酒造は、新潟市の沼垂地区にある。沼垂は、信濃川の水運に恵まれ、発酵食品製造の町として、最盛期は50の事業所が存在した。

酒蔵は、信濃川に面し、古信濃川と栗木川の流末の位置にあることから、物資の輸送上、有意な立地であると言える。

創業は、明治3年（1870年）。石高は約800石である。社是は、「酒に心あり」。米一粒一粒、水一滴一滴には、自然が与えてくれた生命と心が宿っていることから、この恵みと先人達の技を傳承し、心を込めた酒造りを目指している。漫画「美味しんぼ」にも紹介された酒蔵である。

酒米は、兵庫県産の「山田錦」、新潟県産の「五百万石」、山形県産の「亀の尾」を使用している。

水は、水道水である。新潟市の水道水の水源には阿賀野川、信濃川、鳥屋野湯があるが、阿賀野川のものを使用している。

作り手は、かつては杜氏であったが、現在は全て社員化している。地域との関わりでは、近くの湊稻荷神社に、御神酒を毎月奉納している。

日本酒は、「淡麗辛口が最良の酒か!?!」ということで、純米原酒『かわせみの旅』を誕生させている。超甘口タイプの日本酒で、世界的に有名なショコラティエのジャンポール・エヴァン氏がショコラと日本酒のマリアージュが楽しめる唯一の酒として絶賛した。フランスにも卸しており、海外にもその良さを知ってもらいたいとしている。



木造2階建てセガイ造りの社屋（大正10年築）

## ② 若鶴酒造（富山県砺波市三郎丸）

若鶴酒造は、広大な平野に散居村が広がる砺波平野に立地する。文久2年（1862）に創業。当初は300石にしか過ぎなかったが、大正7年（1918）に若鶴酒造株式会社を設立し、昭和12年（1937）には8800石に達している。

酒米は、兵庫県産の「山田錦」、富山県産の「雄町」を、水は、庄川の伏流水を使用している。

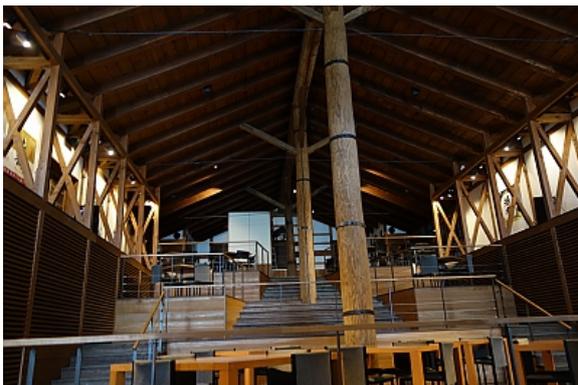
作り手は、かつては、越後杜氏と南部杜氏が2つの蔵で技を競合うというユニークな酒造りを行っていた。平成6年（1994）の南部杜氏の引退を機に、社員のマイスターが酒を造っている。

特筆すべきことは、昭和27年（1952）から、蔵人である社員は、秋から冬は日本酒、春から夏はウイスキー造りを行っていることである。ここは、北陸で唯一のウイスキー蒸留所でもある。

大正11年（1922）に大正蔵を作り生産性を拡大したが、その後、昭和蔵を作ったことから、現在は大正蔵をリノベーションして、若鶴酒造のアーカイブ展示やイベント空間として活用されている。

地域との関わりでは、「バックスとやま」を、酒造の敷地内で開催し、ここに富山県内の日本酒、ビール、ワイン、ウイスキーなど、酒と食が揃う。

また、三郎丸蒸留所は、かつて不二越の工場だったものをクラウドファンディングで広く資金を集め、再生したものである。



イベントスペースとして活用される大正蔵

## ③ やちや酒造（石川県金沢市大樋町）

やちや酒造は、天正11年（1583）に創業し、創始者の神谷内屋仁右衛門が、前田利家公とともに尾張から金沢に移住した。寛永5年（1628）には、「谷内屋（やちや）」の屋号と、「加賀鶴」の酒名を殿様より拝受する。現在の石高は1000石弱。

酒米は、市内三谷地区の契約農家栽培による「五百万石」、「石川門」、吟醸酒には兵庫県産の「山田錦」を使用している。水は、医王山水系の井戸水を使用し、やや軟質で微酸性である。

作り手は、能登杜氏四天王の一人と言われる山岸昭治氏で、全国新酒鑑評会で9回金賞を受賞している。

地域との関わりでは、金沢市内及び近郊の福光屋、中村酒造、久世酒造、武内酒造、やちや酒造の五蔵が協力して、金沢駅にアンテナショップとして『金沢地酒蔵』を開設している。

また、五蔵が協力して「やわらぎの水」を広め、季節酒の「ひやおろし」「うすにごり」などを醸造し、さらに「サケマルシェ」なども行っている。

やちや酒造の家屋・土蔵は、国の登録有形文化財に指定され、旧北国街道沿いに立つ商家の趣のある建物である。



登録有形文化財に指定されている母屋

## ④ 武内酒造（石川県金沢市御所町）

武内酒造は、明治元年（1868）に創業し、石高は80石という小さな酒蔵である。10代目の武内与志朗社長は、蔵元兼杜氏である。

酒米は、石川県産の「石川門」、「五百万石」を使用している。

水は、金沢市の水道水を使用。この地域の地下水よりも水道水の方が水質は安定していることから、次亜塩素酸ナトリウムをろ過して軟水として使用しているとのこと。

地域との関わりは、社長自身が町内会長で、近くの星稜大学や星稜高校の学生をアルバイトとして雇用している。卸業者を通さずに価格を抑えて直売し、「日本一高価な原材料を使った安くてうまい酒」と胸を張って販売している。

## ⑤ 安本酒造（福井県福井市安原）

安本酒造は、嘉永6年（1853）に創業し、石高は約500石である。福井県の中でも米どころとしても有名な東郷に立地している。また、近隣には、朝倉遺跡があり、古くは朝倉氏の城下町として栄えたところである。

酒米は、主に福井県大野産の「五百万石」を、吟醸酒には兵庫県産の「山田錦」を使用している。

水は、地下水である白山水脈伏流水の中硬水を地下200mより汲み上げて使用している。

作り手は、かつては南部杜氏であったが、現在は、蔵元の息子が杜氏を務めている。

酒造りのモットーは、純米酒をメインとして、アルコール添加はしないというのが基本方針である。オリジナルグッズでは、蔵人が使う前掛けや手ぬぐい、酒ケーキなども販売している。

地域との関わりは、名家として古くから地域をリードする役割を果たしてきた。明治22年（1889）建築の店舗兼母屋をはじめ、米倉、土蔵、仕込み蔵など明治中期から昭和初期にかけて建築された10棟が国の登録有形文化財に登録されている。



米どころ東郷に立地する安本酒造の屋敷群

### 「にいがた酒の陣」について

「にいがた酒の陣」は、新潟県酒造組合の50周年を記念して2004年から開催されている。そのモデルとなったのが、ドイツのミュンヘンで1810年から開催されている「オクトバーフェスト」。その土地ならではの食と地酒を楽しむことをコンセプトとしている。

2017年度は、平成30年3月10・11日の2日間、朱鷺メッセで開催され、14万人以上の来場者があった。来場者は、毎年増加している。

酒蔵ブースには、上越・中越・下越・佐渡の約90蔵、約500種類以上の地酒が並ぶ。つまみは、地元の飲食店が25ブース。救護室も用意され、看護師が10名以上待機して、救急にも対応していた。酒飲みには、至れり尽くせりの配慮である。

酒の陣が開催される2日間は、市内のホテルも満室であり、アフター酒の陣で、繁華街も賑わっていた。市内への経済波及効果も大きいと言える。



多くの参加者で賑わうにいがた酒の陣

### 酒蔵の多機能化について

訪問した15蔵では、単なる酒造りにとどまらず、多機能化している酒蔵が多くみられた。

- ・契約農家と連携し、良質な酒米を栽培している事例（八海山醸造所、福光屋、吉田酒造など）
- ・地域と連携し、耕作放棄地に酒米を栽培している事例（玉旭酒造、数馬酒造など）
- ・酒の原料となる水や米、麴等を加工して、調味料や化粧品、スイーツなどを販売している事例（八海山醸造所、福光屋、久世酒造など）
- ・レストランやバーなどの飲食店を営んでいる事例（石本酒造、八海山醸造所、福光屋など）
- ・酒蔵が連携してアンテナショップを開設している事例（福光屋、やちや酒造、武内酒造、久世酒造など）
- ・日本酒以外にウイスキーやビールなどを製造販売している事例（若鶴酒造、八海山醸造所）
- ・蔵人が使う前掛けや手ぬぐいなどグッズを販売している事例（安本酒造など）
- ・飲食や販売だけでなく、研究所や体験施設、ガーデンなどを併設する「酒のテーマパーク」を運営する事例（八海山醸造所）

これら以外にも、創意工夫し、多機能化した酒蔵の事例が多く存在している。



農家や学生と連携して酒米を栽培している事例

## 日本酒と食文化について

日本酒は、4分類に大別され、各々の酒によく合う料理は下記のように整理される。

表 日本酒のタイプ分類とよく合う料理

<b>薫酒</b> ・大吟醸酒、吟醸酒 《よく合う料理》 ・白身魚の刺身、山菜のおひたし、魚介類のカルパッチョなど	<b>熟酒</b> ・長期熟成酒、古酒 《よく合う料理》 ・鰻の蒲焼き、チーズ、ビーフステーキ、豚の角煮など
<b>爽酒</b> ・本醸造酒、普通酒 《よく合う料理》 ・冷奴、生シラスのポン酢、鮎の塩焼き、茶わん蒸しなど	<b>醇酒</b> ・純米酒 《よく合う料理》 ・魚の煮付け、酒盗、すき焼き、餃子、焼き鳥（タレ）など

訪問した酒蔵の中でも、自慢の酒とよく合う料理をホームページやSNSで紹介している事例が多くみられた（石本酒造、八海山醸造所、越の華酒造、玉旭酒造、福光屋など）。

また、地域の食材や季節の料理をはじめ、和食、フレンチ、イタリアン、中華料理、スイーツなど、多様な料理とのマリアージュが楽しめる酒造りに取り組んでいる。

さらに、発泡系やアルコール度の低い日本酒も造られており、好みの多様化に合わせて、酒造りも切磋琢磨され、進化し続けている。

## 地酒文化とまちづくりについての考察

### ①日本酒を知り、さらに広める

國酒である日本酒の知識を深めるため、新潟県では、平成30年4月に日本酒学センターを設置し

ている。これは、新潟県・新潟酒造組合・新潟大学の連携協定により設置されたものである。

また、「にいがた酒の陣」や「バックスとやま」、金沢の「サケマルシェ」などに見られるような日本酒のイベントも各地で開催されている。それらは、地域を巻き込み、生産者と消費者の距離を縮めて、地域のまちづくりへと展開している。

消費者に対して、日本酒に対する知識を深め、広めることは、愛好者を増やすことになり、さらに、日本酒の需要が増えることは、酒蔵はもとより、地域経済が潤うことに繋がる。

### ②地域と連携した酒蔵の多機能化の促進

北陸の酒蔵では、酒造りだけでなく、契約農家と連携したり、耕作放棄地の解消のため、地域住民と一緒に酒米を作ったりしているものもある。

また、酒造りの原料である米や麴を使用して、調味料や化粧品、スイーツなどを販売していたり、さらに、レストランやバーなどを経営したりしている酒蔵もある。

こうしたことから、酒蔵は酒造りのみならず、地域と連携しながら、新規分野を開拓し多機能化しており、今後も継続発展が求められる。

### ③地酒のテロワール化へ

美味しい酒を造るには、厳しい水質基準をクリアした水が必要である。また、酒米を育む気候風土や土壌・水質など自然環境を守り活かすことが求められる。さらに、技術を極めた作り手があって、初めて、酒造りの条件が揃うこととなる。

そうした条件の整った地域が、水や土壌、作り手と一体となって、ワインのように地酒のテロワール化を目指すことが求められる。

地酒のテロワール化を進めることは、地域ブランドにも繋がり、ひいては交流人口の増大など、地方創生にも発展すると考えられる。

## おわりに

本プロジェクトは、3年間で一定の成果を得たが、地酒文化は奥が深く道半ばである。しかしながら、酒蔵は全国各地にあり、各々で酒蔵を核とした地域づくりが展開されているに違いない。

今後は、JUDIの各ブロックにおいて、酒蔵と地域づくりということを切り口に、活動を継続発展して頂ければ、望外の喜びである。

## 夜の水彩カフェテラス

～水辺空間を舞台とした地域の文化創造実験～

関東ブロック 吉田 誠一

### はじめに

東京都江東区、中川船番所前に設けられた「旧中川・川の駅」は地域の憩いの場、自然と触れ合える貴重な水辺空間であり、イベント会場としても地域の住民をはじめ広く活用され、親しまれている。しかし、現状では夕刻から夜にかけての利活用はほとんど見られない。

この「川の駅」を舞台とした夜の活動を仕掛けることで価値を再発見し、活用の幅を広げ、地域や水辺の活動をより一層活性化をすることを目的に実験的イベント（夜の水彩カフェテラス）を開催するとともに、将来的に地域に根付いた継続的な取り組みとなるよう仕組みを構築する。

### 昼と夜と

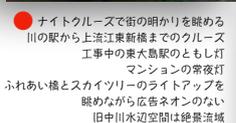
東京スカイツリーから眺める都会の夜景は光の饗宴、綺麗である。東側に目を向けると黒い帯が横たっわっている。帯は500m幅の荒川の流れである。少し不気味。同じ風景でも夜と昼では、見えるものと見えないもの。印象が変わる。

旧中川の夜は暗い。そこで、川辺に「スポットライト」を当てると樹木が浮かぶ、橋が浮かぶ、まるで舞台を観るかのようだ。「川の駅」での宴に興じる。ならば、船も出してみよう！

思いのほか素敵な「川明かり」が広がるではないか。暫くは主役の太陽が登場するまでの間「明かり劇場」を楽しんで見ることにしよう！



## 開催趣旨



## 歴史を紐解くと今が読める

明治時代東京の東側には江戸川、中川、荒川下流部隅田川が流れていた。明治43年(1910)8月の東京大洪水は一府15県を襲った大災害が起きた。

同年秋には臨時治水調査会で、第一次治水長期計画が議論された。政府から調査会に提出した議案は①河川改修 ②砂防 ③森林行政の3件であった翌明治44年(1911)1月22日、衆議院の財政演説で桂太郎首相は、「これからは治山・治水対策」を百年の大計を持って進めなければならない。と力説

議会は2月9日にかけて7回に渡り水害状況、治水計画ならびに治水特別会計が熱く論議された。

災害から半年後、44年度治水事業費は予算委員会で、第1期20河川の選定。全会一致で承認された。荒川は、岩渕で隅田川と分岐する放水路計画を着手、19年の歳月を経て昭和5年(1930)荒川放水路事業は竣工した。くしくもこの年、関東大震災から復興完了を祝い「帝都復興祭」が盛大に開かれた。が、復興計画の父・後藤新平の姿は見られなかった。

前年の4年4月4日、遊説で岡山に向かう車中、米原付近で脳溢血で倒れ、4月13日 逝去 享年71歳だった。

## 分断された中川

中川は、南葛飾郡平井村で、荒川放水路開削工事のため、中川放水路(現中川)と旧中川に分断された

東京市は昭和7年35区体制、旧中川は江東区・墨田区と江戸川区との区境の川に変わり、工業の川に変貌して行くのだった。戦後カスリン台風、キティ2)台風の水害、各工場の地下水汲み上げによる地盤沈下、東京東部の河川は天井川となり水位低下方式という川の水位を下げる工事に着手した。旧中川の護岸整備補強工事は、昭和46年(1971)に始まり、昭和63年(1988)からは護岸親水化に着手した工事も計40年の歳月を経て平成23年(2011)親水河川として再生された。

この日から旧中川は、わずか6.6kmっであるが「まちのにぎわいが生まれる川」へと水辺環境が出来上がった。どう景観デザインするのか!は、

## 夜の水彩カフェテラス

夜の帳が下りるころ★芭蕉・広重・ゴッホ・露伴・荷風・みんな集まったら楽しいな  
旧中川・川の駅 平成29年9月24日(日) 午後5時～午後9時



### 趣旨・背景 歴史を紐解くと今が読める

芭蕉翁が、秋に添うて行ばや末は小松川と詠み、広重は中川口を描き浮世絵はゴッホをも刺激した。露伴は、都会の喧騒を忘れ中川での釣り三昧、師の後を追うように河辺散策の荷風。みんなが時を同じくしてテーブルを囲んだらどんな話をするだろうか。それは、どんなに楽しいことであらうか!

かつて明暦の大火1657年の後、町の広がりを受け、寛文元年1666年、深川から中川筋に移設されたのが中川番所である。明治5年1869年まで208年間続いた舟運の中川は、昭和には工業の旧中川となり昭和46年1971年から護岸補強工事をして親水河川の整備計画が平成23年2011年3月完了した。

2年後の平成25年2013年 旧中川・川の駅が誕生。スカイダックも就航。今ではカヌー、カヤック、レガッタ、ドラゴンボート等 川面の賑わいと河原を歩く楽しみが増えている

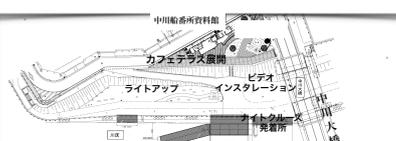
夜と昼のが長さが同じ時の秋分、この日を境に夜が長くなっていく。夜の帳が下りる頃、都会とは思えない心地よい川風と時空間が広がる

会場：旧中川・川の駅 都営地下鉄 東大島駅 大島口 5分 中川大橋

旧中川・川の駅で、川明かりと、美食をも楽しもう!

★ カフェテラスではビール、ワインと軽食をご用意します。(有料)

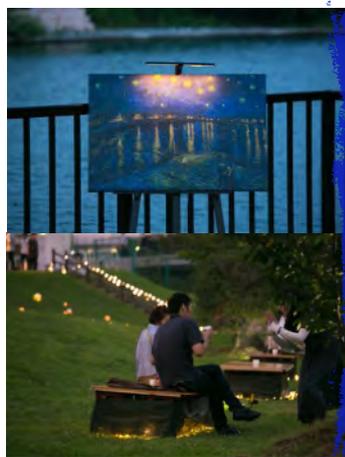
★ 旧中川ナイトクルーズ ガレオン号で川の駅～江東新橋間往復



主催・夜の水彩カフェテラス実行委員会  
協力・NPO法人江東区の水辺に親しむ会  
江東区自河1-3-13-106

Tel.03-5639-2818 メール mizube@talo.city.jp  
コンシェルジュ by yoshida 080-5513-7156 メール seichi1944@me.com

点とは拠点：ここでは「川の駅」 場所を意味する。



夜、**ライト**をあてれば「明かりの魅力」が街を**アップ**する。

東京東部地区の川でライトアップをしているところは、小名木川の西側・「万年橋」と旧中川「ふれあい橋」の2箇所である。川のライトアップの特徴は、川面に写る光。

昼間の風景は無機質、夜の風景は暗くて不安！明かりを灯す、照らす、昼間見なれなかった風景が輝きだす。万年橋とふれあい橋のライトアップに刺激され、「川の駅」で「夜の水彩カフェテラス」として点灯した。川面の光は揺れ、拠点は川の流れの様に街が広がる。「陽は東から」と言うが如く、旧中川からの明かりが、光る！

それは、ここが、東京で、一番美しい川だ と思う！



まちの広がり  
**点と線**

線とは：「道路」「水路」「鉄道」である 広がり意味する。



「川の駅」は旧中川と小名木川の交差点に位置し地域の拠点である。舟運で人と地域を結ぶ。点と線。

夜の街に出ればネオンサイン、イルミネーション、ライトアップ と光り輝いている。  
川筋では、暗さの中に輝きを灯すマンションの整列された常夜灯が  
川面に反射された光りの影で倍増、波の変化で表情が変わるのが綺麗！  
市街地のライトアップとは違うのが川明かりの特徴だ。

来場者のアンケートから、「23区内とは思えないくらい、静かで暗くて雰囲気がある」  
「静かな雰囲気、とても良かった」「ライトアップと食事ができるのが良かった」  
「船を停めての詳しい説明がわかりやすかった」等のお声をいただいた。感謝

協賛していただいた皆様、クルーの皆様に感謝申し上げます。

ナイトクルーズ航路 ● 川の駅～● 江東新橋間往復

参考文献：1)「明治43年水害と第一次治水長期計画の策定」松浦茂樹 東洋大学

2)「旧中川整備事業の完了に向けた取り組みについて」 江東治水事務所事務所

# ローカル線の環境デザインセミナー

中部ブロック 柳田良造

はじめに

ローカル線とは都市部というより中山間地域を走るのどかな路線である。JUDI 中部がここ2年ほど行ってきた美濃路や中山道の旧街道めぐり、焼き物、和紙、繊維、刃物などモノづくり町並みツアーは、実はローカル線で移動する旅でもあった。中部地域とは実は地域で活躍するユニークなローカル線の日本有数のエリアであるとも言える。本プロジェクトは地域環境としても特色を今も保持しているローカル線のうち、岐阜県の長良川鉄道、三重県の三岐鉄道・北勢線、静岡県得天竜浜名湖鉄道などを対象に環境デザインセミナーとワークショップを開催し、それぞれの地域の歴史や環境の特色を明らかにしつつ、ローカル線の地域の生

活の軸としての意味と沿線地域の環境づくりの可能性をさぐるものである。ローカル線は地元の人の足として欠かせないが、常に廃線の危機と背中合わせの面もあり、近年は需要喚起から多彩な企画で観光面や地域づくりの面から注目を集める事例もある。例えば長良川鉄道では沿線の風景の美しさや車両のリニューアルデザイン、車内での特別な食等の企画から注目を集めている。今回のローカル線の環境デザインプロジェクトの開催を通して、ローカル線を含めた地域の歴史や環境軸としての意味を浮き彫りにしつつ、地域空間としての環境的特色を明らかにする。またローカル線に乗り、特徴をもった地域の現地を訪れるその体験を通して地域づくりの可能性を探るものである。



ローカル線の環境デザインセミナー全体地図

## ローカル線の環境デザインセミナー1

天竜浜名湖線に乗り地域の現風景を旅する

日 時：2018年2月17日(土)

場 所：静岡県掛川市、浜松市、愛知県豊橋市

参加人数：6名

9時過ぎに名古屋駅新幹線口集合。掛川まで新幹線に乗る。掛川で東京からの松本さんが合流、風が強くて寒い。天竜浜名湖線(てんりゅうはまなこせん)は、静岡県掛川市の掛川駅から浜松市天竜区の天竜二俣駅を経て、湖西市の新所原駅に至る天竜浜名湖鉄道が運営する鉄道路線。略して天浜線(てんはません)とも呼ばれる。旧国鉄の特定地方交通線であった二俣線を引き継いだ路線。東海道本線から分岐して内陸部に入り、浜名湖の北岸を巡って再び東海道本線に合流しており、掛川-豊橋間の北回りバイパス線ともなっている。掛川で車内で食べる弁当と天浜線の日乗車券を買って天浜線の詳しいパンフレットがついてきた。予定では最初の乗車区間は天竜二股まで行く予定であったが、その手前に「森

の石松」で知られる遠州森駅がある。古い町並みも残っているらしいので、相談して遠州森で下車する。途中の沿線風景は新しい住宅が多く、のんびりした風景とはすこし異なる。遠州森は昔から秋葉神社へ向かう秋葉街道の要衝で、市街地が大きい。駅周辺は区画整理で新しい地区の感じ。滞在時間は1時間ほどなので急いで森町歴史民俗資料館へ向かう。明治18年(1885)建築の木造の旧郡役所を移築復元した資料館はなかなかいい。ゆっくり見る間はなかったが資料館の方の話ではこのあたりは「遠州の空っ風」がふいて体感的にはかなり寒いと言うがその通りで寒い。遠州森から天竜二股の間、車内で駅弁を楽しむ。



森町歴史民俗資料館

## ローカル線の環境デザイン 天竜浜名湖線に乗り地域の現風景を旅する

- 2018年2月17日(土)
- 09:15 JR名古屋駅新幹線口集合
- 09:29~10:32 名古屋駅から掛川駅へ移動(新幹線)
- 10:57~11:47 天竜浜名湖線掛川駅から天竜二股駅まで乗車
- 12:00~15:30 (昼食)天竜二股駅近くの秋野不矩美術館(藤森照信設計)、ROKI グローバル社屋(2017 建築学会賞)、本田宗一郎ものづくり伝承館などを見学
- 15:41~17:00 天竜二股駅から新所原まで乗車
- 17:27~17:36 JR新所原駅から豊橋駅まで移動
- 18:00~20:00 豊橋市内で懇親会
- 20:00~21:00 豊橋駅から名古屋駅へ移動後・解散

- ローカル線の環境デザイン
- ローカル線とは農村や中山間地域を走る線であり、中にはユニークなローカル線が実は多い。ローカル線は地元の人の足として欠かせないが、近年は需要喚起から沿線の風景の美しさや車両のリニューアルデザイン、車内での特別な食等、多彩な企画で注目を集めつつある。ローカル線の環境デザインとはローカル線を旅し、地域空間の原風景をさぐる環境セミナーである。
- 天竜浜名湖線
- 天竜浜名湖線(てんりゅうはまなこせん)は、静岡県掛川市の掛川駅から浜松市天竜区の天竜二俣駅を経て、湖西市の新所原駅に至る天竜浜名湖鉄道が運営する鉄道路線。略して天浜線(てんはません)とも呼ばれる。旧国鉄の特定地方交通線であった二俣線を引き継いだ路線。東海道本線から分岐して内陸部に入り、浜名湖の北岸を巡って再び東海道本線に合流しており、掛川-豊橋間の北回りバイパス線ともなっている。



ローカル線の環境デザインセミナー1「天竜浜名湖線に乗り地域の現風景を旅する」ポスター

天竜二股駅は天浜線のほぼ中間に位置し、天竜浜名湖鉄道（株）の本社もある拠点。二股駅構内の運転区建物群や扇形庫、転車台は国の登録有形文化財である。天竜二股は天竜川が遠州平野に出る谷口に位置し、天竜杉の集散地として、江戸期には徳川家康の長男徳川信康城主の二股城も設けられた。寒いのでタクシーで秋野不矩美術館まで相乗り。今回の展示は秋野不矩の作品でなく、がっかり。帰りは商店街を歩くが、浜松市天竜区二股の現在は、地域がかなり寂れている感じ。途中で



天竜二股駅



天竜二股駅の待合室で



秋野不矩美術館

本田宗一郎ものづくり伝承館を見学。建物はこの地で生まれ育った本田宗一郎の業績を記念し旧二股町役場を改装したものである。初期の頃のオートバイの展示もいいが、本田宗一郎を支え名参謀と言われた藤沢武生の存在について改めて知れたのは面白かった。

3時半過ぎに天竜二股から今日の終着点である東海道本線との合流点の新所原駅を目指して列車に乗る。途中はみかん畑が沿線に多く、「フルーツパーク」という駅も現れ、その次の駅が都田駅。駅舎がおしゃれなカフェの再生されているのを発見する。また別な機会を設けて来たいと思う。金指、浜名湖沿いの三ヶ日を通り、5時に新所原駅に着く。東海道線で豊橋に移動し懇親会后、名鉄で戻る。



本田宗一郎ものづくり伝承館



フルーツパーク駅周辺の車窓



カフェ併設の都田駅

## ローカル線の環境デザインセミナー2

### 長良川鉄道の初夏を旅する

日 時：2018年5月20日(日)

場 所：岐阜県美濃加茂市、郡上八幡市、関市

参加人数：3名

長良川鉄道越美南線(えつみなんせん)は、岐阜県美濃加茂市の美濃太田駅から岐阜県郡上市の北濃駅に至る鉄道路線である。元は日本国有鉄道(国鉄)の路線で開業は1923年(大正14)、岐阜県と福井県とを結ぶ鉄道(越美線)として建設された。全通は果たせず、福井県側の越美北線は西日本旅客鉄道(JR西日本)に承継されたが、岐阜県側は国鉄分割民営化を前に1986年(昭和61)第三セクター化された。美濃市付近から終点北濃駅まで長良川に沿って走っており、眺望を楽しめる。関-美濃市間は並行する名鉄美濃町線の新関-美濃間が1999年に廃止されたため、駅を増設し同線の代替機能を持つようになった。

2016年4月から、車内で沿線の食材を使った料理を提供する水戸岡鋭治デザインの観光列車「ながら」

車「ながら」が金・土曜・休日を中心に美濃太田-北濃間で1日1往復運転されている。

好天に恵まれ、岐阜から美濃太田へのJRに乗るが若い白人のグループが乗っているのにもなぜか今日のツアーが面白くなりそうな予感でわくわ



水戸岡鋭治デザインのながら

### ローカル線の環境デザイン2 長良川鉄道の初夏を旅する

■2018年5月20日(日) ローカル線の環境デザイン in 岐阜

- 10:30 美濃太田駅集合
- 10:45-12:57 美濃太田-白山長滝(観光列車「ながら」1号ビュープラン車内で弁当)
- 13:00-14:30 長滝神社・若宮修古館・白山文化博物館見学
- 14:36-15:18 白山長滝-郡上八幡
- 15:30-17:30 郡上八幡町並見学
- 17:35-18:34 郡上八幡-関刃物会館
- 18:45-20:00 懇親会(関うなぎの名店仕屋)
- 20:29-20:46 関刃物会館-美濃太田着・解散

●長良川鉄道

長良川鉄道越美南線(えつみなんせん)は、岐阜県美濃加茂市の美濃太田駅から岐阜県郡上市の北濃駅に至る鉄道路線である。元は日本国有鉄道(国鉄)の路線で開業は1923年(大正14)、岐阜県と福井県とを結ぶ鉄道(越美線)として建設された。全通は果たせず、福井県側の越美北線は西日本旅客鉄道(JR西日本)に承継されたが、岐阜県側は国鉄分割民営化を前に1986年(昭和61)第三セクター化された。美濃市付近から終点北濃駅まで長良川に沿って走っており、眺望を楽しめるトロッコ列車を1992年から2003年まで運転していた。関-美濃市間は並行する名鉄美濃町線の新関-美濃間が1999年に廃止されたため、駅を増設し同線の代替機能を持つようになった。2016年4月27日から、車内で沿線の食材を使った料理を提供する水戸岡鋭治デザインの観光列車「ながら」が金・土曜・休日を中心に美濃太田-北濃間で1日1往復運転されている。

■観光列車「ながら」

都市環境デザイン会議・中部ブロック

ローカル線の環境デザインセミナー2「長良川鉄道の初夏を旅する」ポスター



ながら車内



ながら・もりのロゴ



長良川を渡る

トがもとてもよく、弁当を拡げると結構気分が出てくる。となりのグループは発車するなり、テーブルに弁当、ワインなどを拡げ大盛り上がりの感じ。観光列車「ながら」は主な駅にしか止まらず、急行の感じ。車内ではガイドならぬキャビンアテンダントさんが沿線の楽しい案内をしてくれる。すっかり仲良くなって、一緒に記念撮影。沿線の景色、特に長良川をなんだか渡る橋からの景観はすばらしい。1時間半ほどの列車の旅で郡上八幡駅に到着。大半の乗客はそこで下車。我々はそこからゆったりと景色を眺めながら、終点のひとつ手前の白山長滝駅をめざす。

白山長滝駅を降りてすぐ前が長滝白山神社の参道。日本各地に分布する白山神社の中心的神社の一つであり、白山信仰の美濃国側の中心である。奈良時代に泰澄大師により創建されたとされ、昨年開山1300年が行われた。以前は白山中宮長滝寺(はくさんちゅうぐうちょうりゅうじ)と称したが、明治の神仏分離により、長滝白山神社と長瀧寺に分離された。現在も長滝白山神社と長瀧寺は同一境内にある。杉の大木



長滝白山神社の参道



長滝白山神社境内

に囲まれた境内は規模も大きく、隆盛を極めたと言われる鎌倉、室町時代をしのばせる。神社の巫女さんに話を伺うと、代々神主の若宮家の方。「若宮家」は、白山長瀧神社の社家で、およそ千二百五十年前から代々神主だそうだ。若宮家を訪ねるとうっそうとした樹木にかこまれた県指定の重要文化財で、びっくり。敷地には江戸中期の母屋や、谷崎潤一郎の『細雪』の舞台のひとつとなった『爛柯亭』が移築されているとか、とにかく驚きの連続であった。

若宮家住宅の近くの鉄道路踏切を渡り次に向かったのが、国道沿いで「道の駅」の横に建つ「白山文化博物館」。白山文化のシンボル施設として、円錐を半分にした形で白山をイメージした外観だそうで、内部は白山文化を写真・映像で紹介するテーマ展示室からなる。しかしその奥に廊下でつながって地域の民俗文化財の展示室、郡上一揆を展示する部屋も設けられている。全体としては規模も大きく展示も面白いのだが施設としての統一感がなく、国道脇の立地もよくない。となりの「道の駅」が賑わっているのに、ほとんど入場者がいない。長瀧白山神社とその集落域、若宮家があまりに素晴らしかったの比し、関連する公共施設の寒さにしらける。

2時半過ぎに白山長瀧駅から再び長良川鉄道に乗り、南下。予定では郡上八幡で下車し町並を散策する予定であったが、郡上八幡は何度も



長良川鉄道のいい佇まいの駅風景

来てるし、降りてもあまり時間もないので、パスすることにして刃物で有名な関まで行く。関駅で降りて、街を歩くが見事にシャッター街となった商店街の本町、栄町界限に疲れた足が重くなる感じ。関は刃物、金属加工産業の町として今も力があり、都市規模としてはそこそこの規模の感じだが、市役所を筆頭に都市施設の郊外化、分散化が進み、中心部の解体が起こり、中心商店街が全く衰退化してしまった感じ。

シャッター街の本町で唯一の気配と行列のできる有名な鰻屋「辻屋」に入り、懇親会と今日の感想を語る会。懇親会の後、関駅まで別ルートで歩くが関善光寺という山裾に建つ立派寺院群たその近くの民家の町並の質の高さにびっくり。こういう資源がまったく都市デザインに活かされていない現状に、中心部の衰退は歴史的な必然というより都市政策の失敗という思いがわいてくる。関から三度長良川鉄道に乗り、出発点の美濃加茂へ。美濃加茂到着後、解散。発見と再認識の今日の環境デザインセミナーであった・

### ローカル線の環境デザインセミナー3



シャッター街の関市本町通り



関市本町通りの唯一の賑わいー鰻の辻屋

## 鉄道歴史を語るナローゲージ北勢線と三岐線を旅する

日 時：2018年6月3日(日)

場 所：三重県四日市市、いなべ市、桑名市

参加人数：6名

三岐鉄道・三岐線(さんぎせん)は、四日市市の富田駅から三重県いなべ市の西藤原駅までを結ぶ26.5kmの鉄道路線で昭和6年(1931)開業。三岐の意味は三重と岐阜をつなぐということからとられており、当初の計画では三重(四日市)から岐阜(関ヶ原)までつなげる予定であった。旅客輸送のほか、富田駅-東藤原駅間でセメントを中心とした貨物輸送を行っており、JR以外でセメント輸送を行う唯一の鉄道事業者である。並行して走る三岐鉄道・北勢線は西桑名駅からいなべ市の阿下喜駅まで、全13駅約20キロの道のりを1時間ほどで走る鉄道で全線開業は大正3年(1914)。日本で3本しかないナローゲージ(特別狭軌)の鉄道では一番

長い論戦である。レール間の幅は(762mm)で、新幹線(1435mm)の半分ほどしかない。車両のスケール感がかわいく、親しみがわく。平成15年(2003)に近鉄から三岐鉄道が譲り受け営業を継承している。

第3回目の環境デザインセミナーは四日市の三岐鉄道富田駅に9時集合し、三岐線に乗車する。この路線は貨物輸送の収益が4割ほどあるよう



イエローカラーの三岐鉄道

## ローカル線の環境デザイン 3 鉄道歴史を語るナローゲージ北勢線と三岐線を旅する

■2018年6月3日(日)

- 09:00 近鉄富田駅・三岐線ホームに集合
- 09:11~09:44 三岐線富田駅から丹生川駅に移動
- 09:50~10:45 貨物鉄道博物館を見学(見学は約50分)
- 10:45~10:55 庭箱鉄道シャトルバスで北勢線阿下喜駅に移動
- 11:00~12:00 軽便鉄道博物館を見学(見学は約1時間)
- 12:30~14:30 昼食 上木食堂・阿下喜まち歩き(稲垣邸マンボ・桐林館他)
- 15:01~15:11 阿下喜駅から楚原駅に移動
- 15:30~17:30 土木遺産他見学(ねじり橋・めがね橋・八幡神社見学)
- 17:28~18:13 楚原駅から西桑名駅に移動
- 18:30~20:30 懇親会 たけの古や、

### ●三岐鉄道北勢線と三岐線

三岐鉄道北勢線は三重県桑名市の西桑名駅から三重県いなべ市の阿下喜駅までを結ぶ20.4kmの旅客輸送の鉄道路線である。日本では数少ない一般営業を行う軌道幅762mmのナローゲージ(特殊狭軌)の鉄道路線である。(ナローゲージ現役3路線:北勢線、四日市あすなろ鉄道内線、八王子線、黒部峡谷鉄道) 路線は1914年(大正3年)、大山田(現在の西桑名)一起原間14.5kmに軽便鉄道として開業した。翌年、桑名町(後の桑名京橋)―大山田間0.7kmが開業(昭和36年に廃止)。翌々年、楚原―阿下喜間(後の六石)間4.6kmが開業。1931年(昭和6年)六石―阿下喜間1.4kmが開業し、この時に全線が電化された。幾多の変遷を経て近畿日本鉄道(近鉄)の路線となっていたが、業績赤字により近鉄が廃止の意向を打ち出したため、2003年(平成15年)10年間の約束で地元自治体の支援により三岐鉄道が運営を継承している。支援により、駅舎の建替えや改修、車両の冷房化、無料駐車場設置などの結果、利用者数の増加傾向がみられる。三岐鉄道三岐線は三重県四日市市の富田駅から三重県いなべ市の西藤原駅までを結ぶ全線単線の電化路線として、1931年(昭和6年)に富田―西藤原間26.5kmが開業した。富田駅―東藤原駅間で旅客輸送の他、セメント(太平洋セメント)を中心とした貨物輸送を行っている。自転車を車内に持ち込めるサイクルバス制度があり、近鉄富田駅以外で利用できる。

四日市・桑名が関西鉄道(現JR関西線)により、名古屋と結ばれる明治28年頃、多くの鉄道計画が名古屋を目指さず、大垣・関ヶ原を目指したことは、いかに木曾三川の築橋が難しかったかと同時に、在来からの養老山脈に沿った物流ルートを彷彿とさせる興味深い歴史がここにある。



三岐鉄道 北勢線



三岐鉄道 三岐線



都市環境デザイン会議・中部ブロック

ローカル線の環境デザインセミナー 3「鉄道歴史を語るナローゲージ北勢線と三岐線を旅する」ポスター

で、車両の内部もそっけないほどで観光の意識はまるでない。丹生川（にゅうがわ）駅で下車、月1回第一日曜にだけオープンしている貨物鉄道博物館を見学。ボランティアだけで運営してそうだが、鉄道ファンが遠くから集まっているようで、かなりの賑わい。この日だけ運行している箱庭バスで北勢線阿下喜駅へ移動。線路脇の土地でこれもボランティアが運営している軽便鉄道博物館を見学。こども連れが多く、ミニ電車に乗って楽しそうである。

阿下喜（あげき）は北勢の中心として栄えた歴史をもつ。阿下喜駅から坂を登り、台地に質の高い古民家が今も残る町並がある。そのなかに明治期の元旅館の建物を再利用した上木（あげき）食堂がある。建物は平成2年（1990）に旅館廃業後長く空家になっていたが、「自分のつくった野菜を使い、気軽に仲間が集えるような店がほしい」と考えていた近隣の若い農家が手をあげ、建物所有者とも協力し建物を改造。名古屋のカフェに勤める

友人を店長に、平成28年（2016）11月にオープンしたものである。当日は天気もよく開け放たれた食堂には気持ちいい空間となり、行列のできる人気店になっていた。夜は地元のおじさんも集まる居酒屋になるそう。その他にも元の小学校をカフェに再利用したものや、民家改造のギャラリーなど注目集める再利用事例を見学。

3時過ぎにナローゲージ北勢線に乗車し、楚原駅



丹生川駅の貨物鉄道博物館



阿下喜に残る立派な古民家



人気の上木食堂



阿下喜の歴史的な町並み



上木食堂のインテリア

下車。楚原は阿下喜とともにいなべ市の核となる市街地。まず、近くの由緒あるお寺の真養寺（しんにようじ）を訪れ、寺の歴史などを住職から聞く。その後、北勢線にかかる土木遺産であるねじり橋・めがね橋を見学。

再び北勢線に乗り、楚原駅から終点の西桑名に移動。ナローゲージのヒューマンスケールともいえる空間感覚に改めて感激。桑名での懇親会后解散となった。



ねじり橋の上を通る北勢線の光景



楚原駅での北勢線



ナローゲージ北勢線の車内

まとめ

ローカル線の電車という交通手段を媒介にした地域の小旅行は楽しい、魅力いっぱいのものであった。地域の再発見の旅でもあった。3つの路線のすべてで車の移動では気づかない場所、環境、車の移動ではふれることのない地域の暮らし、人との出会いがあった。ローカル線という交通手段を使い訪れるということは地域の空間、暮らし、歴史のトータルな文脈の中で地域の場所を体験しうるものである。車ではそれが断片化し、残念ながら全体は体験できない。

電車内の体験も、ゆったり景色を見ながら、名物駅弁をたべながらの談笑、地域の人達の観察、それぞれに興味深く、楽しいものであった。

吉本隆明がかつて『都市にのこる民家覚え書』の中で「存在することだけで価値あるものが、この世界に確かにある。」と述べたが、ローカル線についても同様の感慨を持った。

最後に地域の人達がローカル線を誇りにし、愛し、その活用と存続のために、様々な取り組みを熱心に展開している姿に、今回直接ふれることができたことは何よりもうれしいことであった。

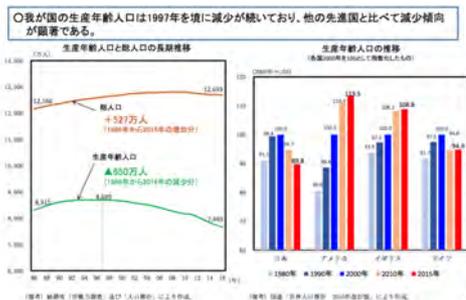
# 「電動車椅子利用者のための、街のQOLガイドマップ」づくり ～ 真のユニバーサル社会を実現するために ～

関東ブロック 阿部 彰

## 【背景】

我が国における総人口の減少と重なるように団塊世代の高齢化が進み、下の左側のグラフのように人口減少に比べて生産人口の減少率が高く、急激に減少していることを表している。

先進諸外国に比べても日本の生産者人口の減少は際立っており、この現実は今国策上も原因の把握と対策が効果的でないことを表していて、適切な政策立案を待つまでもなく、ハンディキャップを持つ人の社会進出が期待されている。



2020年のパラリンピックが障害者への理解が深まり、企業の支援も盛んになってユニバーサル社会の構築に期待が寄せられているが、一般の身体的障害者はパラリンピックの選手たちのようにバリアを勢いよく乗り越えることはできるものではなく、車椅子の利用者を例にとると、独りでは2cmの段差が乗り越えられない。視線の高さも50cm違うだけで危険に晒され、そして心で感じあうバリアは無量大に近いものがある。

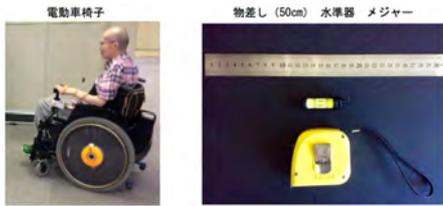
## 【QOLマップをつくる目的と意義】

身体的障害者が自立して日常を過ごすことがQOLを保つ必須条件である。昨今では多様な補助機器が開発されているが、電動車椅子もそのひとつで様々な障害を持つ人々が街に出られるようになってきた。今までの介助人がエスコートする車椅子利用とは異なり、独りで外出することができるが、これまでのバリアフリー基準では不満足な部分が少なくない。身体的な障害を持つ人が日常利用する目線でのガイドマップづくりが必要である。

歩道を中心に自治体が制定している「やさしい街づくり条例」に沿って敷設してあるが、一様な状態でできている訳ではなく、歩道から横断歩道にアクセスする場合も恐る恐るアプローチするスロープも少なくない。トイレも中の装備が共通ではないことから、持つ障害によって使えなかったりする。事前に設備内容の調査がされ、情報提供されていれば、無駄に足を運ぶことなく障害のタイプに対応する選択ができる。

工事やイベントなどにより臨時的に一定の期間利用しにくい状態が告知され、終了したら解除されるような情報マップができれば安心して外出することが可能になる。



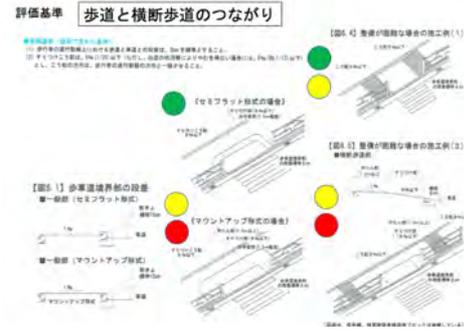


**【調査方法と評価】**

車椅子利用生活者が日常的に活動するテリトリーを概ね500m四方と想定し、一単位エリアにおけるバリアフリー施設（トイレ・歩道・傾き・スロープ・段差・公共設置エレベーター・工事など・今回は車椅子で入れる店舗や飲食店は除外）を東京都中央区制定のやさしい街づくり条例の資料に沿って考え方や数値を照合し、中でも高さや狭さから見て基準を守ることが困難な状況にも拘らず整備したものについて重点的に調査したとこ

ろ電動車椅子を利用して通過する際に、全く通行できないものと、第三者のサポートを受ければ通過可能なものについて分類した。

これらの調査データを分析評価して安全なものを緑色、注意および第三者のサポートが必要なものを黄色、敷設物として存在してはいるが利用や通過に支障があるものを赤色で評価して地図上にマークした。



ピクトグラム	種別	概要
	青	多目的トイレ
	青	エレベーター
	青	救急病院
	青	走行推奨スロープ
	緑	走行推奨歩道傾斜
	黄	走行注意歩道傾斜
	赤	走行危険歩道傾斜
	緑	乗り越え可能段差
	黄	乗り越え注意段差
	赤	乗り越え危険段差
	緑	掲示情報
	黄	注意喚起情報
	赤	回避情報

**【他の同類マップ事例との違い】**

バリアフリーマップは全国的に存在している。それらは全てのバリアフリー施設が適切に敷設されていることを前提にしているが、車道と歩道のレベル差も一定ではないし、歩道の幅も歩道の形式もまちまちである。そのために交差点に入る際にスロープの勾配は中央部と端部では異なることから、60cmの幅しかない車椅子でも傾いてしまう。上半身の強い人ならバランスをとって交差点に向かうことができるが、脊椎損傷などで体幹が強くない障害者は、この傾きが恐怖になるに違いない。そのような意味合いから一つ一つのスロープを評価して、自分の症状に照らし合わせ



0年以上の歴史がある。一方車椅子の歴史も長く、本格的に姿を見かけるようになったのは1951年に制定された身体障害者福祉法から徐々に普及し始め、1964年の東京パラリンピックで欧米製の性能が高いことに触発されて急速に普及したと言われている。さらに1977年に独行の電動車椅子がJIS制定されて、普及が加速される環境ができたが、本格的な普及は2005年の「障害者雇用促進法」の改正により社会の中に障害者を正しく位置付けるようになり、さらに顕著になる高齢社会と人口減少社会において障害者の労働力が必要な社会が訪れたということなのであろう。

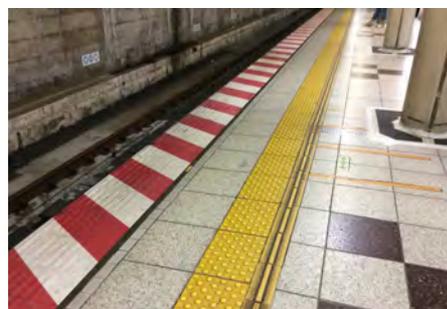
しかしながら予々思うことだが、車椅子の通過と視覚障害者誘導用ブロックは決して共存性が良いものではなく、特に体幹が弱い脊椎障害を持つ独行の電動車椅子では歩道の傾斜が伴うことで滑り転倒などの事故に遭遇する恐れもある。50年前から時代も進み新しい技術が進歩する中で、その当時予想されなかった諸条件を改良しつつ、現存する誘導ブロックと共存させながら次第に新しい姿に変えていく技術開発的研究も必要ではないかと考え、幾つかの素材や技術を組み合わせて大学の研究室と連携した開発を予定している。



全盲障害者に行ったインタビューによると、東京では至る所に柵があり、ぶつかることは屢々だが転落することがないと笑っていた。田舎に行くと水路や土手で柵がない場所が多いので転倒や転落することが多いとのこと。そのような背景から10年ほど前に鉄道総合研究所と視覚障害者が共同で「混合ブロック」を開発したそう。頁右の写真は電車のホームの端を示し、片側は安全で反対側は危険であることを示しているものだそうである。このブロックを上手く使うことで、水辺などに必要以上の柵を作る必要はないのではないかと

指摘されたのである。

因みに、ホームの先端にある紅白のストライプは視覚障害者用ではなく、歩きスマホによる転落事故を防ぐためのサインだそうだ。



### 【車椅子搭載可能なJPNタクシーの登場】

道路のバリアフリー対策も儘ならない内に、昨年10月、写真のようなJPNタクシーがトヨタ自動車から発売された。トヨタではコンフォートタイプのタクシー車の生産を中止したこともあり、全国的に急速に普及している。

コンセプトに大きな荷物も車椅子も載せることができると謳われているが、車椅子乗客を積極的に乗せるにはまだ幾つかの問題がありそうである。最も大きな問題は、乗降にそれぞれ10分以上かかり、運転手はいつメーターを倒すのか気になるころであろう。しかも座高が高い電動車椅子の搭載は難しく、従来の介護タクシーに頼ることになる。ただし、ユニバーサル社会時代のモビリティのあり方について、新しい問題提起となっていることは確かなのであろう。



### 車椅子を搭載できるタクシーが登場・・・

トヨタ自動車カタログより

※ 調査協力

相田忠男、中川 浩 (以上 一般社団法人無段差社会)  
河田法之、丸山昌子、吉田 尚、岩田正恵、日野千鶴

# 四国の都市環境デザイン

## 見学事例集とモデルコース作成 ～香川県編～

四国ブロック 高知工科大学

### 1.目的、目標

都市環境デザインは、建築、土木、造園などの分野を超えた共同作業で成り立っており、他分野について学ぶ必要がある。分野横断的に事例を網羅した資料がない場合、見学時に事前調査で多大な時間と労力を費やし、優れた事例を見逃すことが考えられる。四国の様々な分野を網羅したデザイン事例を収集・整理することで、優れた事例を見逃すことがなくなる。見学のモデルコースと資料集を作成し、web公開することで誰でも使えるツールとして完成させることを目標とする。

### 2.作業工程

主な作業工程は以下の通りである。詳細は次項より記述する。

- (1)事例収集・マップ作成
- (2)事例視察
- (3)モデルコース選定
- (4)パンフレット作成
- (5)ホームページ作成
- (6)事例見学ツアー実施

### 3.事例収集と整理

#### 3-1. 香川県内の事例の収集

書籍やインターネットから、香川県内に存在する建築・土木構造物・文化遺産等の情報を収集し、整理した。各事例では主に、

- (1)取り上げた建築・土木等の名称
- (2)住所
- (3)緯度・経度
- (4)関連する情報 (URL 等)
- (5)備考

以上の項目を整理した。

#### 3-2. 事例マップの作成

収集したデータを基に、事例マップを作成した。

### 4.事例視察とモデルコース作成

#### 4-1. 事例選定

250程度ある香川県内の事例を優先度の高いものと低いものに分類し、優先度の高いものから調査した。調査員が実際に現地に赴いた事例の中から幾つかを離島、東讃、西讃ごとに選別し、モデルコースを作成した。モデルコースの条件として、「高松空港を利用して、日帰りで回ることができるコース」を設定した。

モデルコースを選定する際のポイントとして、

1. 調査員が実際に確認して興味を引かれたもの、みるべき価値があると感じたもの。
2. 調査員が要した見学時間と移動時間を基に、日帰りで回ることが出来ること。
3. 空港からの距離が極端に離れすぎでないこと。
4. 一般的な認知度は低いが、これから広く周知していきたいもの。
5. 見学に不向き (病院など) でないこと、見学に特別な許可等を要しないこと。
6. 付近への車両の駐車がある程度容易であること。

以上を念頭にコースを選別した。

以下コース別説

## 離島コース

- ①中山千枚田
- ②(廃) 高坂隧道
- ③小豆島オリーブ公園
- ④新内海ダム
- ⑤ヤマロク醤油

## 東讃コース

- ① 被雲閣
- ②イサム・ノグチ庭園美術館
- ③旧恵利家住宅
- ④志度寺
- ⑤新川橋梁

## 西讃コース

- ①竜宮橋
- ②旧讃岐鉄道岩屋架道橋
- ③多度津港旧外港東防波堤
- ④満濃池
- ⑤豊稔池堰堤

## 5.パンフレット作成

パンフレットはそれぞれのコースごとに、3種類作成した。形状検討として、「持ちやすさ」「十分な情報量の確保」の2点を両立するために、両側観音開きを採用した。事例の説明や、一目でコースの位置関係がわかる地図などを掲載した。



## 6.ホームページ作成

それぞれの事例のページには、概要や受賞歴を掲載しており、自分たちが実際に訪れた時に感じた不便なことも、車で行く際の注意点として記載している。



## 7.事例見学ツアー



HPの試運転やモデルコースの確認を兼ね、5月に離島（小豆島）コースのツアーを開催した。

## 8.今後の活動について

今年は一昨年のお愛媛県、昨年の徳島県に続き、香川県を舞台にモデルコースの作成を行った。来期は高知県の調査を行い、四国都市環境デザインマップを完成させる予定である。

# 防府駅前の空き地を活かすパブリックデザインプロジェクト

中国ブロック 防府市中心市街地活性化協議会 林 靖之

## 1. はじめに

山口県防府市は、山口県の中央部に位置し、自動車メーカーマツダの主力工場を擁す、人口約12万人の地方都市です。

古くは周防国の国府が置かれ、江戸時代には長州藩を治めた毛利氏の統治で、藩の海の玄関口として位置づけられ、その遺構は今も防府市内に残されています。

そしてまちのシンボルであるのが学問の神様として市民から親しまれている菅原道真公を祀る「防府天満宮」です。防府のまちはこの防府天満宮から港へと続く街道沿いに商店が建ち並び、市街地が形成されました。



△防府市のシンボル 防府天満宮

しかし、ロードサイド型大型店の進出と競合により、防府天満宮から中心部に位置する防府駅との間に位置する中心商店街は、撤退や廃業などにより急速に衰退し、平成11年には229店舗を数えた店舗数は、平成28年には162店舗と5分の3に減少し、その結果もあり、中心市街地に多くの空き店舗・空き地が発生することになりました。

そうした中平成28年8月に防府市では中心市街地の活性化のため、防府市中心市街地活性化協議会を設立し、防府市と共に中心部の抱える問題に対して、もう一度正面から向き合い、活力あるまちなかを作るために、官民が連携して実行計画

づくりに取り組んでいるところです。

## 2. 空き地の利活用とあるべきマネジメント

防府駅前から中心商店街にかけての駅前・中心市街エリアでは、前述のようにかつての商店街・繁華街であったものが衰退し、空き地が目立つようになってきました。こうした空き地には大規模な空地にはマンション用地などに利活用される一方で、土地面積のそれほど広くないものは、そのまま空き地として残される場所もあります。



△防府駅前の商店街通り入り口にある空地

たとえば上記の箇所のように、道路沿いの角地であってもこのように空き地として残されています。調査の結果、こうした場所に多いのは土地所有者間で境界が定まっていない「筆界未定」となったまま残されているケースが多いことがわかりました。また、駐車場などへ転用されるケースも多く、こちらもこの30年で3倍以上に増加していることがわかりました。確かに求められているニーズではあると思いますがまちの景観・デザインという面から見たときにはたしてそれが望ましいものであると言えるのか、という問題もあります。

## 3. まちづくりフォーラムを通じた

あるべきパブリックデザインの考察

こうした中で、防府市におけるこうした場所の利活用の手法を探るため、まちづくり・デザインにそれぞれのアプローチから取り組まれている3氏を防府に来てもらい、防府のまちづくりメンバーとの意見交換から、考察してもらいました。



広場ニスト・全国まちなか広場研究会 理事の山下裕子氏は、活用のポイントとなるのは、角地にあたるポイントや空き地であり、そうした場所を「まちなか広場」として広場的な利用を促す場とすることで、多様多様な人が利用可能なフィールドとしていくことであると述べられました。

防府駅前や商店街エリアにある空地については、人が集うというパブリックな性格を持つ松山市にある「みんなの広場」の様な、景観面・交流機能を持たせた「まちなか広場」の必要性を述べられました。



AllianceSocialShareOfficeBeppu 代表 宮井智史氏は、起業支援と移住促進プロジェクトに携わる経験から、「活力のあるまち」という光景・景観を生み出すため、まずはまちに新しいプレイヤーを育てていくことと、そうしたプレイヤーが集まるエリアを作ることで、街のイメージをかえていこ

とを述べられました。



NPO 法人ドネルモノの宮田智史氏からはその場に関わる住民・商業者自らが考え、空き地だけでなく地域を「デザインしていく」ことを提唱、地域に目を向け、活動する人を組成することで、その活動の場としてこうした空き地・低利用地の利活用が進んでいくのではないかと述べられました。

3氏それぞれのアプローチと、会場の意見をまとめると、

1. 駅前、商店街入り口、商店街内といったポイントの空地には広場的な利用を促し、集まることの出来る「まちなか広場」が求められる
2. 新たな創業者や場に関わる住民・商業者とともにその場を利用、活動の場とする人を組成していくことが空き地・低利用地の利活用につながるとなりました。

### 3. おわりに

今年に入り、長らく未利用であった防府駅前の空地もマンション用地として開発が始まるなどここに来て空地の解消が見られる一方で、この開発にとどまり、パブリックな利用につながる利活用の動きは見られていません。

「人が集う」パブリックな空間の活用手法を一端を今回の中から見いだすことが出来ましたので、いかにして防府に実現していくか、民間事業者・行政・地域住民とともにこれからも対話を重ねることで見いだしていきたいと思ひます。